

高速道路に入ってから、もう二時間近くが経っていた。海に向かうはずだった車は、事故渋滞の最後尾に捕まったまま微動だにしない。前にも後ろにも、びっしりと車が詰まっている。右は中央分離帯、左はガードレール。外に出るところか、窓を大きく開けることすらはばかれるような距離感だ。

椎谷は最初から、どこか落ち着かなかった。雄大に「海行かね」と声をかけられた時、断る理由が見つからなかった。

「……事故渋滞か」

雄大がナビを一瞥して、静かに言った。

「二時間は動かないな」

感情のない声だった。怒るでも焦るでもなく、ただ状況を確認するような、低い声。

「そっか……長いね……」

俺が窓の外に目をやった時、助手席のシートが静かに倒れた。

「え、ちょっ」

「時間ができた」

それだけ言って、雄大はシートを倒したまま天井を見上げた。表情は変わっていない。ただ、こちらに向けた視線だけが、少しだけ違う色をしていた。

（時間ができた、って……それ、そういう意味じゃ、ないよね？）

嫌な予感が、じわりと背筋を這った。でも雄大はしばらく、なにもしてこなかった。ラジオが渋滞情報を読み上げている。俺は膝の上で手を重ねて、前の車のナンバープレートを眺めていた。だから、ずっと手が伸びてきた時、完全に油断していた。雄大の指先が、俺のパンツの腰のあたりに触れて、ウエストのボタンにかかった。

「ちょ、ちょっ。雄大、待ってよ！」

「動かないんだから、丁度いいって」

言い訳でもない、確認するような言い方だった。
ボタンを外されて、ファスナーを引き下ろされた。
雄大の手が、ゆっくりとズボンの中へと滑り込んでくる。急いでいない。

「や、やめ……っ」

「あんま大きな声出すと、外に聞こえるから」

低く、静かに言われた。窓の外、すぐそこに他の車がある。ドライバーがいる。その一言だけで、俺の声はひっこんだ。

（聞こえちゃう。こんなの、声が聞こえてバレたら最悪だ……！）

雄大の手が下着の上を辿ってきた。

「……っ♡」

思わず息を詰める。雄大の指先が、ボクサーパンツのふちをなぞる。触れるか触れないかのギリギリで、じりじりと迷わせる。

「やめて、雄大……」

ちゃんと言えたと思ったのに、声が掠れていた。

「ほんとに止めてほしければ、ちゃんとはっきり言わないと♡」

追い打ちのように言われて、余計に声が出なくなる。軽い声ではなかった。低く、確信を持った声で言われている。

下着の上から、割れ目に沿って指が押し当てられた。

「んっ……ッ♡」

小さく声が漏れた瞬間、雄大が「ね」と言った。

「反応してんじゃん♡」

「ちがっ、これは……♡」

(ちがうのに……♡)

ぐ、と下着の上から押し込みながら、ゆっくりと指をくにくに♡と動かされる。薄い布越しなのに、熱くて明確な感触があって、頭がじわりと痺れた。

「や……う、ん……っ♡」

「気をつけろよ♡ 声、前の車に聞こえる♡」

耳元で言われて、口を押さえる。でも指は止まらない。布地を割れ目にめり込ませながら、ゆっくり、ゆっくりと擦り続ける。じわじわ、じわじわ♡と、奥から蜜が滲み出てくるような感覚がある。

(だめ。これ絶対だめな方向に行ってる……♡ 声出したら外に聞こえちゃう♡ 雄大は最初から、こ